

# 藤栄

ワキ 最明寺時頼

男 月若家臣

シテ 藤栄

トモ 藤栄従者

ツレ 鳴尾某

立衆 同伴者

ヲカシ 鳴尾下人

季は 地は 摂津  
雜

「ゆくへ定めぬ道なれば。く。こし方も何処ならまし。

詞  
「是は諸国一見の僧にて候。我いまだ西国を見ず候ふほどに。此度思ひたち西国行脚とこうろざして候。

サシ  
「城南の離宮に趣き。都を隔つる山崎や。関戸の宿は名のみして。泊りもはてぬ旅のならひ。うき身はいつもまじはりの。塵のうき世の芥川。猪名のは

小箇を分けすぎて。

下歌  
「月も宿借る昆陽の池。水底きよくすみなして。

上歌  
「蘆の葉わけの風の音。く。聞かじとするにうきことの。捨つる身までも有馬山。かくれかねたる世の中の。うきに心はあだ夢の。さむる枕に鐘遠き。難波は跡に鳴尾潟。芦屋の里に着きにけり。

く。

ワキ詞  
「急ぎ候ふ程に。芦屋の里に着きて候。日の暮れて

候ふほどに宿を借らばやと思ひ候。いかに是なる  
塩屋の内へ案内申し候。

男 「誰にて渡り候ふぞ。

ワキ 「諸国一見の僧にて候。一夜の宿を御かし候へ。

男 「やすき程の御事にて候へども。あまりに見ぐるし  
く候ふ程に。御宿は叶ひ候ふまじ。

ワキ 「見ぐるしきは苦しからず候。道に行き暮れたる修  
行者にて候。ひらに一夜を明かさせて賜はり候へ。

男 「さらば御宿を参らせんと。いぶせき床の塵はらひ。

地 「十符の菅薦。しきりに松風や。うき世の夢を覚ま  
すらん。さていつの世の情ぞや。雨は降らねど此  
宿は。一樹の陰とおぼえたり。」

ワキ詞 「まことに御志ありがたう候。や。是なるをさなき  
人はよしありげに見えて候。たが御子息にて候ふ  
ぞ。

男 「いや名も無き人にて候。

ワキ

何の

「いかに仰せ候ふとも唯人とは見え給はず候。何の苦しう候ふべきまつすぐり御名のり候へ。

男 「何をか包み申すべし。是は芦屋の先地頭藤左衛門殿の御子息にて渡り候。

ワキ 「なふそれは何とてかやうに賤しき海士の奴とはなり給ひて候ふぞ。

男 「叔父御の藤栄殿に跡を押領せられ。かやうに不思議なる所にて御入り候。

ワキ 「言語道断の次第にて候。さて重書をば御持ち候はぬか。

男 「重書もこれに候。

ワキ 「そと御見せ候へ。

男 「いや／＼大事のものにて候ふ程に如何にて候。

ワキ 「そと見申してやがて返し申さうするにて候。

男 「さらば御意にて候ふ程に。そと御目にかけ候ふべし。

ワキ

「何々芦屋の庄七百余町の所。一男月若に譲りおく  
処なり。芦屋の藤左衛門尉家俊判。や。何とて  
かやうの証跡たゞしきものを御持ち候ひて。御訴  
訟は候はぬぞ。

男  
「其事にて候。運の尽くる所は。最明寺殿さへ修行  
に御出で候ふ由うけたまはり候ふ間。何とも了簡  
なく候。

ワキ  
「あら痛はしや候ふ。今夜の御宿の御恩に。此をさ  
なき人を三日が間に世に立てゝ参らせうするにて  
候。

男  
「是は何とやらん誠しからず候。

ワキ  
「御不審尤にて候ふさりながら。世には奇なる事  
もあるものにて候。唯某に御まかせ候へ。  
「さらばたのみ申さうずるにて候。

ワキ  
「さて藤栄殿の在所はいづくにて候ふぞ。

男  
「あれに見えたるが藤栄殿の御館にて候。今日は浦

遊びに御出で候ふよし申し候。

ワキ

「さらば浦にいへ、彼人に逢ひ申し候ふべし。又此重書をば某に御あづけ候へ。月若殿をば御同道候

ひて。あとより御出であらうするにて候。

男  
「心得申し候。

シテ詞

「是は芦屋の藤栄にて候。今日は日もうらゝに候ふ間。浦遊びに出でばやと思ひ候。いかに誰がある。

トモ詞  
「御前に候。

トモ

シテ  
「浦遊びに出で候ふべし。舟の事申し付け候へ。  
トモ  
「畏つて候。

シテ  
「いかに誰かある。あれに当つて笛鼓の音の聞え候ふは。いかなる事にてあるぞ尋ねて来り候へ。

トモ  
「畏つて候。尋ね申して候へば。鳴尾殿の御酒迎に。囃物をして御出であると申し候。

トモ  
「さらば此所にて待たうずるにて候。

シテ

「然るべう存じ候。

鳴尾「川岸の。」

地「川岸の。根白の柳あらはれにけり。そよの。」

シテ「あらはれて。いつかは君と。」

地「君と。」

シテ「われと。」

立衆「我と。」

シテ「君と。」

地「枕さだめの。やよがりもそよな。」

シテ詞「是までの御出過分に存じ候。」

鳴尾「某に御かくし候ふほどに。御酒迎の為めに酒を持たせて候。一つきこしめされ候へ。」

シテ「かゝる祝着なる事こそ候はね。さらば一つ給べうずるにて候。」

ヲカシ

「いかに藤栄殿へ申し候。某が舞をそとさし申さうするにて候。」

シテ「たゞ醉ひて候ふ程に舞はうするにて候。吉野立田

の花もみぢ。

地  
「更科越路の月雪。 (舞)

地クリ  
「それ舟の起りを尋ぬるに。 みなかみ黃帝の御宇よりおこりて。 ながれ貨狄が謀によれり。

シテサシ  
「こゝに又蚩尤といへる逆臣あり。

地  
「かれを滅ぼさんとし給ふに。 烏江といふ海を隔てゝ。 攻むべきやうもなかりしに。

クセ  
「黃帝の臣下に。 貨狄といへる士卒あり。 ある時貨

狄庭上の。 池の面を見わたせば。 をりから秋の末なるに。 寒き嵐に散る柳の。 一葉水にうかびしに。

又蜘蛛といふ虫。 是も虚空に落ちけるが。 其一葉の上に乗りつつ。 次第々々にさゝがにの。 いとはかなくも柳の葉を。 吹きくる風にさそはれ。 汀によりし秋霧の。 立ちくる蜘蛛のふるまひ。 げにもと思ひそめしより。 たくみて船をつくれり。 黃帝これにめされて。 烏江を漕ぎわたりて。 嵩尤をやす

く滅ぼし。御代を治め給ふ事。一万八千歳とかや。

シテ「しかれば船のせんの字を。君にすゝむと書きたり。

さて又天子の御顔を。龍顔と名づけ奉り。船を一葉と言ふ事。此御宇より始まり。又君の御座舟を。龍頭鶴首と申すも。此御代よりおこれり。

ワキ詞「たゞ今舞まうたるものゝ名字をば何といふぞ。

ヲカシ「藤栄殿と申して隠れなき人候ふよ。

ワキ「其藤栄に。先の舞こそ面白けれ。今一さし舞へ見

うといへ。

ヲカシ「それはたが左様に申し候ふぞ。

ワキ「愚僧が言ふと言へ。

ヲカシ「心得て候。いかに申し候。あれなる修行者の藤栄殿の舞こそおもしろけれ。今一番舞へと申し候。

シテ「さやうに申すはあれなる修行者の事にあるか。

ヲカシ「さん候あれにて候。

シテ「やすき間の事。舞をば以前まうてある間。今度は

八撥を打つて聞かせうずると申し候へ。

ヲカシ  
「シカく。」

シテ  
「いやく苦しからぬ事にて候ふ左様に申し候へ。」

ヲカシ  
「畏つて候。いかに申し候。唯今の由申して候へば。」

舞をば以前に御まひ候間。八撥を打つて御見せあらうすると仰せ候。

ワキ  
「急いで打てと言へ。」

シテ  
「ゆくへもしらぬ修行者に。舞一さしと乞はれたる

は。あつぱれ藤栄が為めには面目にて候。總じて八撥を打ちたる事はなけれども。あまりに彼奴が憎さに。わざと撥を大きにあつらへ。小笠の内へ見参申さでは叶ふまじ。」

地  
「もとより鼓は波の音。よせては岸をどうとは打ち。天雲まよふ鳴神の。とゞろくと鳴る時は。降りくる雨ははらくはらと。小篠の竹の。音も八撥も。いざ打たういざ打たう。」

「此上はさし扇をのけられ候へ。小笠の内へ見参申さう。

「やあ是こそ鎌倉の最明寺実信よ見忘れたるか藤栄。なにとて八撥うたぬぞ打てとこそ。汝は過分の振舞かな。何とて総領月若をば追ひだし。いやしき海士の奴となす事。前代未聞の僻事なり。われ諸国を修行する事全く余の儀にあらず。かやうの在々所々の政道を致さんが為めなり。いかに月若。あら不便や此間さこそ無念にありつらんな。事おほしといへども。けふは最上吉日なれば。芦屋の庄七百餘町の所。月若が知行たるべきなり。又藤栄が事は重科人の事なれば。いかなる流罪死罪にも行ふべけれども。よしく慈悲は上より下り。仇を恩にて報ずるなれば。汝が知行それは相違あるべからず。今日よりしては総領を総領とし。一家繁昌たるべしと。かさねて安堵を下しければ。

地「げにありがたき御政道。直なる時の世に出づる。

月若が心の内。天にもあがるばかりなり。

「やがて本宅に立ちかへり。く。知行の道もたゞ  
しく。総領庶子繁昌し。一族の栄花きはもなし。  
百姓も万民も。みな朝恩にほこりて。栄ふる御代  
とぞなりにける。